

## 頚動脈超音波検査が繰り返すシャント不全改善の契機となった一症例

◎澤本 剛志<sup>1)</sup>、平野 佳代子<sup>1)</sup>、古田 美佳<sup>1)</sup>、熊谷 康平<sup>1)</sup>  
白山石川医療企業団 公立松任石川中央病院<sup>1)</sup>

【はじめに】頚動脈超音波検査は頚動脈の中内膜肥厚や動脈硬化症の進展度・狭窄病変、中枢側や末梢側の血流評価が出来る。今回、透析患者への頚動脈超音波検査が繰り返すシャント不全改善の契機となった症例を経験したので報告する。

【症例】70代男性

【既往歴】#末期腎不全 \*維持透析中 #狭心症

【経過】20XX年9月の頚動脈超音波検査時、左椎骨動脈で収縮期逆行性波形を認め、左鎖骨下動脈狭窄を強く疑った。しかし鎖骨下動脈起始部が深部であった為、超音波検査での評価が困難であった。またシャント肢への血圧測定は禁忌でありABI検査での上肢血圧の左右差などは評価出来ない。そこで予定されていた冠動脈造影と同日に追加して左鎖骨下動脈造影を行ったところ高度狭窄を確認した。この結果より左鎖骨下動脈起始部高度狭窄によるシャント血流低下の影響が示唆された。後日、左鎖骨下動脈起始部狭窄に対する経皮的血管形成術(以下PTA)を施行した結果、上腕動脈血流の顕著な増加(200→1200ml/min)を認め、そ

の後頻発していたシャントトラブルは報告されていない。

【考察】PTA直後からシャント肢血流の大幅な増加を認めたこと、繰り返していたシャントトラブルがPTA後6ヶ月経過しても認められていないことからシャント肢血流低下の要因の一つが鎖骨下動脈狭窄によるものと考えられる。本症例のような短期間でシャントトラブルを繰り返す場合では中枢側の動脈、中心静脈など幅広く動静脈を観察し評価することが重要である。

【まとめ】今回、椎骨動脈血流波形より有意病変を推測出来たこと、シャントトラブルが頻発していると認知出来たことが繰り返すシャント不全改善の契機となった。透析患者における頚動脈超音波検査は動脈硬化評価だけでなくシャント肢への間接的評価となることを念頭に置いて検査を進める必要がある。

連絡先 公立松任石川中央病院 医療技術部検査室  
076-275-2222(内線 2731) 澤本剛志